

「山県学園構想」に想う

山県市教育委員会 教育委員 大野良輔

山県市の教育委員となって3期12年が過ぎようとしています。着任当初は美山地域を中心とした小中学校の統廃合が済まされた状況の中、小中学校適正規模基本方針を踏まえながら第2期の統廃合を検討課題とするような時期でした。周囲も当然のように次はどの地区の学校の統廃合化を検討すべきかの声がそれとなく上がっていたように記憶しています。私自身もそのことを至極当然のことのように受け止めていました。

平成から令和になって、教育委員会が提言したのが「山県学園構想」でした。市内の小学校9校と中学校3校を合わせて一つの学園というとらえ方、これは画期的なことでした。現在は市内にある高校1校をも含めてその構想の中に組み立てようとするその視点はまさに「目からウロコ」でした。小規模な学校も残しながら、共に学びあう体制を整える。そのために子供たちの移動にとどまらず、先生たちもその専門性を発揮するために学校間移動をする発想は驚くばかりでした。「山県学園オープンスクール」でその成果の一端を見させていただいて、少なからずこの学園構想に希望の光を見つけることができました。

子供たちの成長を基軸に置いた環境づくりが一定の効果を上げつつある一方、自治会からの脱会や未加入といった地域の崩壊が始まっているという危機的な状況にあるのが現状です。総合教育会議で講話いただいた寺脇研氏が以下のようにお話しされました。

「小学校区を中心とした自治会という考え方で活動等をとらえ実行していることが大切ではないか」

これは私たち大人に突き付けられた大きな課題であり、「山県学園構想」は少子化による学校存続の課題に対しての解答の一つであることに留まらず、地域の活性化にもつながっていくものでありたいと考えます。

講演を聞いて

八百津町教育委員会 教育委員 杉山 文

先日ある講演を聞いてきました。夜回り先生の話でした。関わった中高生の各問題にどう接してきたか、その子はどうなったのか、気楽に聞いてはいけないような話で、奥深く怖くもありました。

初めは横浜とか都会の出来事であり、また身近に話にあるような子供を見ていないため遠い場所での話のように聞いていましたが、話が進むにつれなんと救われない子供が多いのかが分かって驚きました。

その子供たちの今とその先の悲しさや、悲惨さを淡々とまた抑揚をつけて話され、聞いていた周りの方々の目に涙があふれて、静かにハンカチを出されていました。

助けようにも助けられない状況に置かれた子供の最後を何度も見てこられた話は聞く側にも辛いものでした。

その先生のブログによると、荒んでいく要因には、過去の虐待、いじめなどがあり、苦しみや悲しみを誰にも言えず抱かえ込み、リストカットや薬物などに助けを求め、そして心が壊れていくのだといいます。

その子供たちに伝えたい事こととして、大切なのは、嬉しいとか悲しいとかという思いを、少しでも身体で表すこと、それができたら言葉に出して身近な家族や友人に簡単な言葉でいいから伝えてみる事ことだそうです。もちろんそれは、その子供たちにとってなかなか難しいことでしょうが・・・。

講演が終わって先生が席を立たれた後、司会の方に促されて壇上に駆け上がり、先生の元に行く髪を茶に染めた女性がいました。少しして泣きながら戻ってきましたが、この近くにもお世話になった子がいたのかと驚きました。更生されたのなら、本当に良かったと、感じました。

薬物問題は地方にも広がり、身近にもあると聞きました。もう都会だけの事例ではなくなってきているようで、世の中で誘惑に負けない強い心の子供たちを育てていくために、一人一人を認めその個性も大切にしていけるのが大切なのでしょう。

親としても、わかっていながらつい比べたり叱ったりで、なかなか認め、褒めが出来ないのが現状で、後で必ずしまったと反省している事が多いのですが・・・。

講演された先生は同年齢でした、毎日をゆっくり過ごしている自分と違い、毎日を荒れてしまった多感な年齢の中高生に、今もなお関わり、更生に導くことを使命とされているようで、頭が下がりました。